

# 金沢大学学生の入学時・卒業時におけるPCリテラシー PC literacy at the time of admission and graduation of Kanazawa University students

森 祥寛, 佐藤正英, 松本豊司  
Yoshihiro MORI, Masahide SATO, Toyoji MATSUMOTO  
金沢大学総合メディア基盤センター  
Information Media Center, Kanazawa University  
Email: mori@el.kanazawa-u.ac.jp

あらまし：昨年度末から今年度初めに、金沢大学入学生と卒業生に、それぞれパソコン操作に関する技能についてアンケートを実施した。その結果、本学の入口と出口における学生のリテラシーがどのように変化したか（あるいは変化しなかったか）について、ある程度、知ることができた。これらについて報告する。

キーワード：情報教育, 教育の質保証, 情報リテラシーの変化

## 1. はじめに

金沢大学では、2006年度から新入学生全員に入学時にノートパソコンの準備をさせるとともに、学内での情報活用環境の整備を進めてきた<sup>(1)</sup>。これを背景にして、全大学1年生を対象とした必修授業「情報処理基礎」を開講した。この授業は、ICTに関する基礎的な内容を、実習を主として学ばせ、金沢大学学生として最低限のICT活用能力を身につけさせることを目的としている。この授業で、情報モラルやPCリテラシー等について、アンケート調査を実施している。また、2011年度に、金沢大学3学域化による組織改編後、初めての卒業生を輩出したことを契機に、4年生（医学類及び薬学類以外は卒業生となる）に対して、必修化させたノートパソコンの利用等についてアンケート調査を行った。このアンケートによって学生にPCを持たせた結果、学生時代にそれをどのように活かしてきたかについて確認をした。

## 2. アンケート調査概要

アンケート調査には、金沢大学学生・教職員用のポータルサイト「アカンサスポータル」を使用した<sup>(2)(3)</sup>。その一機能である学習管理システム（以下、LMSという。）のアンケート機能を用いて、新入学生については、毎年22コース作られる情報処理基礎の授業用コース内に、卒業生に対してはアンケート用のコースを作成して行った。本稿では、PCリテラシー等に関する部分について取り出し、両者の調査結果を比較した。調査内容は、PCリテラシーに関して、①パソコン等への好悪、②情報処理基礎程度の知識、③パソコンの全般の基本的な操作、④パソコンで行う文章作成の基本的な操作、⑤パソコンで行う表計算の基本的な操作、⑥パソコンを利用して行うプレゼンテーションの5項目に対して40問の設定問を設定した。評価自体は、自己評価とし、各設問に対して、「できる（100%）」から「できな

い（0%）」まで、5段階で評価してもらった。加えて、「そもそも、何を聞いているか分からない」「学んでいない、作業したことがない」という選択肢も用意し、単に「できない」に該当しない場合にも対応できるようにした。

表1 有効回答数と回答率（括弧内数値）

|        | 2013年度<br>新入学生 | 2012年度<br>4年生 |
|--------|----------------|---------------|
| 全学     | 1,780 (97.7%)  | 317 (16.7%)   |
| 人間社会学域 | 768 (98.7%)    | 144 (18.0%)   |
| 理工学域   | 621 (96.8%)    | 114 (16.3%)   |
| 医薬保健学域 | 391 (97.2%)    | 59 (14.8%)    |

## 3. 調査結果

本調査を行った結果、有効回答数と回答率は表1の通りである。図1は、パソコンそのものに対する好悪について聞いた結果である。新入生の方が「好き」に傾いている。この結果、本調査対象となる学生は、全体としてパソコンに対する嫌悪感情を持つことはほとんど無いようだ。ただし、好悪とPCリテラシー習得の状況について、その相関をみると、全般的に低い正の相関が認められたことから、好悪感情がPCリテラシーの習得に影響があることも否定できない。

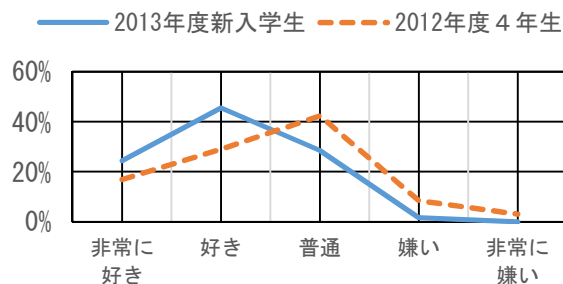


図1 パソコンに対する好悪

図 2, 3 は表計算ソフトが使えるかどうかについての結果である。図 2 では、「実験や観察、アンケート調査、数値計算等によって得られた研究で用いる様々なデータを、表計算ソフト (Excel 等の他、データベースや、自作プログラムによるデータファイル等も含む) でまとめ、整理することができる」かどうかを聞いている。表計算ソフトを用いて、各種データを整理するのであれば、4年間の学生生活の中で、授業や研究活動、サークル活動等を通じて、その使い方を身につけることができているようである。しかし一歩踏み込んだ統計的処理になると、図 3 のように新入生の頃と変わらない結果を得ている。なお、4年生のデータが 2 つあるのは、SPSS のような既存のソフトウェアを使用する場合 (長破線) と自作のプログラムによって統計処理する場合 (点破線) で分けて聞いたためである。ここから本学においては統計処理作業までは学ばせていない、或いは、自信を持ってできると言える程には習得させることができているということであろう。

これ以外のデータについては、自己評価の平均値を比較する形でまとめてみた。自己評価の「できる (100%)」を 5 点とし、「できない (0%)」を 1 点としてとり、「そもそも、何を聞いているかわからない」「学んでいない、作業したことがない」の選択者についてはデータから除外して評価した。その結果、ほぼ全ての項目で自己評価が 4 年生の方が高くなっていることが分かった。総体として PC リテラシーが学生生活の中で向上していると言えるだろう。その中でも文章作成ソフトの取り扱いと、プレゼンテーションに関しては明確な上昇が見取れる。逆に表計算やトラブル対処等については明確な上昇を見ることができない。ただしトラブル対処 (不正アクセスやコンピューターウイルスへの対処等) については、高度に技術的な対応方法を聞いて

いると勘違いしている可能性があり、それ故の結果とも考えられる。

#### 4. まとめ

今回の調査結果を検討することによって、金沢大学における学生の PC リテラシーの向上についてはある程度見ることができた。問題はこの上昇が金沢大学における情報教育の成果であるかが明確で無い点である。

今回の結果について、別の見方をすれば、実際に使用する機会の多いもの程、能力の上昇が見られることである。これはレポート等で使用を迫られる文章作成ソフトが向上し、そうで無い (と思われる) 表計算ソフトが向上していないことから分かる。金沢大学で行われている情報教育は、主に共通教育科目 (所謂、教養的科目) であり、その後は研究室やゼミに配属になった後で、その教員や院生等から学ぶか独学で習得しているのだ。このようなやり方を否定するものには無いが、本調査結果を踏まえるなら、さらに一歩進んだ形での教育の機会を、より一般的且つ全般的な PC リテラシーを習得させる形で与えていく必要があるようだ。

#### 参考文献

- (1) 鈴木恒雄, 井町智彦, 笠原禎也, 佐藤正英, 車古正樹, 高田良宏, 松本豊司, 森 祥寛, 堀井祐介: “教材開発とイーラーニングの学内普及へ向けての取り組み”, メディア教育研究, 2006, Vol.2 No.2, P.11-17.
- (2) 東 昭孝, 笠原禎也, 高田良宏, 二木恵, 松平拓也, 森祥寛: “金沢大学全ポータルシステム (アカンサスポータル) の開発思想と運用状況”, 大学情報システム環境研究, 2013 掲載予定
- (3) 堀井 祐介, 森 祥寛: 新アカンサスポータル紹介, COM.CLUB, 広報 31(1), 6-7, 2008-03

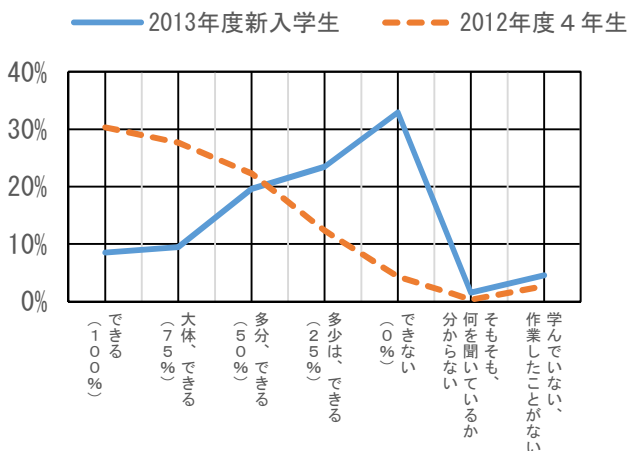


図 3 データを表計算ソフトでまとめることができる

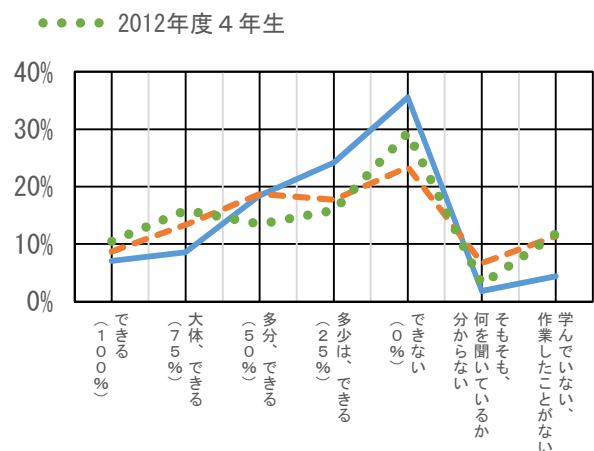


図 3 表計算ソフトでまとめたデータを、統計的に処理できる